『語用論研究』第 4 号(2002 年) pp. 123-130
@2002 年 日本語用論学会

海外の動向

アメリカにおける語用論研究(1)
「カリフォルニア大学サンタバーバラ校」

林　宅男

1. はじめに

広大な地理的広がりをもつアメリカでは、語用論の研究においても地域的な多様性がある。今回は西海岸の大学の中でも特に談話分析が盛んなことで知られ（筆者自身が在外研究で客員教授として一年間滞在した大学でもある）カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (University of California, Santa Barbara[UCSB]) における語用論の研究の取り組みについて、その特徴を紹介したい。

語用論は言語が使用されるコンテキストとの関係でとらえようとする学問であり、複数の領域で実践される研究分野であるとともに、学際的な側面をもつ。UCSB においては、言語をとりまく様々な問題について、言語学科のみならず、教育学部、社会学部、コミュニケーション学科などにおいて、それぞれの異なる立場とアプローチによって、実際の相互行為の中で使われる言語の（構造や機能を）談話レベルで分析する研究が盛んに行われている。また、後に述べるように、UCSB にはこれらの関連領域の学部・学科を中心とする、学部を超えた学部間の学際的な研究組織があり、活発な研究・教育活動を続けている。

2. 言語学科における取り組み

先ず、言語学科における語用論研究の取り組みについて、その一部を紹介する。ここでの言語研究の特徴は、様々な文法現象について談話における機能面からその特徴を記述し、説明しようとする点である。この研究の方法は、「談話機能アプローチ」(discourse functional approach) （Cumming &Ono, 1997:112）と呼ぶことができるもので、ここでは談話とは単に言語使用が具現される(manifested)場であるのみならず、文法が「現れる」（emerge）源としてとらえられる。つまり、文の規則は談話の中で頻繁に起こるパターンによって創りだされ、変化を遂げるものであるという立場をとる。談話機能アプローチの研究では、例文を研究者の創作によるものではなく、自然の言語データから選び、テキストの中での使用頻度を分析の重要な判断材料に使う。“grammars "code best what speakers do most" (Du Bois, 1987)という表現はこのアプロー

チの正当性を的確に表わしているといえる。このような方法に基づく言語研究は、もともと、Firth に端を発し、Halliday や Firbas、Mathesius らによって代表されるプラーグ学派(Prague School)の研究者によって発展を見たヨーロッパのコミュニカティブアプローチの流れを汲むものである。しかし、アメリカで、文法を言語使用と切り離してとらえるいわゆる「自律的アプローチ」(autonomist approach)の言語学と一線を画する形でこのような研究方法が確立されたのは、70 年代になってからである（Cumming ＆Ono,1997:113)。

談話を言語研究の中心におく研究は、50 年代から７０年代にかけて、さまざまなテーマで推進されてきたが、現在まで最も多くの研究者によって関心を寄せられてきたのは、談話における「情報の流れ」(information flow)を扱った研究である。中でも早くから独自の理論を提唱し、その研究に最も大きな影響を及ぼしてきたのは Wallace Chafe(1976, 1980, 1994)で、その理論の基本となるところは、発話は意識が「活性化」（activation）された際の言語的表現であるという考えである。彼はこの考えに基づき、意識の活性化を intonation unit と呼ばれる短い発話の単位と結びつけた上で、それを視覚における「焦点化」と比較し、intonation unit の中の情報を発話の際の活性化状態の違いによって、新、既知、入手可能の３つに区別する。この考察は、指示表現（referential expression）(名詞句、代名詞、省略形)の用法を始め、情報の性質からみた主語の制約、intonation unit の中に現れる新情報の数の制限等、多くの言語現象に説得力のある説明を提供する。発話を意識の活性化の言語的具現とみる彼の理論は、他にも、時制や副詞表現の分析や、それらを巧みに使った「歴史的現在」や小説の表現手法の分析にも応用されている（Chafe は現在 UCSB の Emeritus Professor であるが、談話分析関連の講義やセミナーを担当しており、近況報告によると、ジョークを含めた会話における「笑い」(laughter)に関する本の執筆中である他、The Pear Film についての話の「再報告」(retelling)を分析して、言語と記憶の関係について研究しているとのことである)。

「情報の流れ」に関する研究は、Pear Film Project に加わった研究仲間によって様々な角度から行われたが(Chafe, 1980)、UCSB の Patricia Clancy と John Du Bois はその中のメンバーでもある。Clancy はそのプロジェクトでは、意識の活性化と関連させて、認知的観点から、語りの談話構造の中における指示表現の使われ方を日本語と英語で比較分析し、近年は日本語、韓国語を中心に子供の発達過程の中での談話の習得を認知的、社会的側面から研究している。Du Bois の研究は指示表現に見られる冠詞の用法に関して、定性(definiteness)の違いを、その指示物が Pear Film についての語りの中

で後にどのような形跡 (trace)をたどって同定されるかに着眼して分析したものである。彼は、この考察を発展させ、後に格標識による言語類型の違い（能格言語と対格言語）について、談話における名詞句の指示物の新旧の違いが文法構造と密接に関連していることを示した (1985, 1987)。これは、Preferred Argument Structure と呼ばれる研究テーマで、そこでは彼は（特に他動詞の）主語は既知情報をとる傾向があることを指摘した。また、彼は文化的な視点からの言語研究も行っており、現在は会話における話し手の「スタンス」(stance)と文法の関係にも注目している。

UCSB における注目すべき研究は談話分析の内容を支配するともいわれるデータの表記化・符号化の研究である。Du Bois は、表記の原理（transcription design principles）を提案し（1991）、Chafe の intonation unit に基づくシステムの開発を推進している。また、同僚の Susana Cumming らとの共同研究では、会話のデータベースから談話の統語的構成要素、及びその指示性や活性状態などを表すコンピュータシステムを開発する研究にも取り組んでいる (1993)（なお、会話データの表記化・符号化は、彼の担当する Transcription and Analysis of Spoken patterns of natural language という授業の中でも扱われている）。Cumming はコンピュータを使った言語分析を一つの専門分野とし、テキスト構造の分析と生成プログラムの研究を行っている。

談話機能アプローチに基づく研究における重要なテーマに談話構造に関するものがある。中でも興味深いのは、文形式がテキストの高次の構造と密接な関係があることを指摘するものである（Cumming ＆Ono, 1997: 122）。これについては、Sandra Thompson (1987)の文頭の副詞節(initial adverbial clause)に関する研究がある。when や before などに導かれ、主節に従属する副詞節は、修飾する節の前にも後ろにも置かれるが、彼らは語りにおけるデータを分析し、それが文頭に置かれる場合は、単に時間的な連続性を示すだけでなく、後に続く主節の内容を述べるにあたって、それを（中断されたあとで）今までの話の流れに（境界をつけたり元に戻すための）位置づけをする(orient)指標的働きがみられると指摘している。更に Thompson は Mattthiessen との共同研究（1988）において、副詞節などの従属節は、それそのものがテキストのレトリック構造に基づく文法化(grammaticalization)であると指摘する。この指摘は、William Mann との共同研究(1986)によって提案されたレトリック構造理論（Rhetorical Structure Theory[RST]）の中の「核」(nucleus)と「衛生」(satellite)の概念にから導かれたものである。なおレトリック構造理論は（もともとコンピュータによるテキスト生成プログラムの開発を目的に考案されたものであるが）テキストの構造を一貫性の観点から記述する手段として、上にあげた文法事象の研究の他、多くの目的に応用され

ている。Thompson はこの他に、様々な文法事象について、詳しいデータ分析に基づいて、言語形式は情報の流れなどコミュニケーションにかかわる機能的要因によって選択されることを示している。

3. その他の関連学部・学科における取り組み

UCSB における談話分析の研究は、言語学科のみならず、他の学部・学科においても盛んに行われている。先ず、社会学部においては、一般の人々がどのような方法で場面に応じて(locally) その行為を達成するかを詳細に記述するエスノメソドロジー、およびその流れを汲む会話分析の研究が盛んである。Don Zimmerman は、社会福祉施設における官僚的手続きについての研究(1969)や会話における割り込みと沈黙を性差の視点からとらえた West との共同研究の他、警察への緊急電話連絡の場面での会話の分析研究で知られている (1992)。同じくエスノメソドロジーから会話分析にわたって、特に相互行為の理論的側面を扱う研究者に（授業は担当するが今は名誉教授の）Thomas Wilson がいる。彼は日常の会話のやりとり(mundane conversation)の研究から得られた知見を社会構造と関連させ、一般に見られる基本的メカニズムあるいはその変異形(variants)について、人々が、それを通してどのようにしてそれぞれの場面の規範に位置づけ(orientation)をしながら、目標を達成するかを明らかにする重要性を指摘している(1991)。一方、会話のやり取りの連続(sequence)の中におけるターンの実践(turn taking practice)の研究については、Gene Learner が精力的に取り組んでいる。彼は発話相手による話の補完(co-participant completion)の現象に注目し、それがどのようにして実践され(1991)、そこにみられる合成発話単位(compound TCU)が文法構造とどのような関係にあるかを研究している(1996)。また、これと関連して、このようなターンが教育現場でどのような使われ方をしているかについても考察している。

最後に UCSB における談話・会話分析の研究は、教育やコミュニケーションの研究者の間でも盛んに行われている。中でも Judith Green は教室における談話分析に早くから携わってきており(1983)、最近では特にエスノグラフイーの観点から、どのようにして、教室における発話のやり取りを含めた教育の実践を、リテラシー、社会的知識形成、及び学習に結びつけることができるかを研究している(1998)。更に、地元の学生や教師を含むエスグラファーの研究グループ、Santa Barbara Classroom Discourse Group のメンバーとしても実践に繋がる研究活動を行っている。また、教育学部には同じくエスノグラフイーの観点から、教室におけるリテラシーの社会言語学について、特に成人学習とリテラシー及び言語を通したジェンダーの社会化を研究する

Cook-Gumperz がいる(1996)。一方、コミュニケーション学科においては、Howard Giles は、社会心理学の観点から言語とコミュニケーションの問題を幅広く扱う。彼は、異なるグループ間における言語使用の convergence と divergence とコミュニケーションの距離の関係を扱ったアコモデーション理論(communication accommodation theory[CAT])(1991)の提唱者としてよく知られているが、現在は特に警察と犯罪者間、異なる世代間、異文化間のコミュニケーションの問題を扱っている(1997)。

4. 学部間共通セミナー(LISO)について

以上、UCSB における語用論、特に言語学科における談話・会話分析の研究を中心にその特徴と概略を紹介したが、冒頭でも述べたように、UCSB には LISO と呼ばれる学部・学科を越えた学際的な研究組織がある。これは、Language, Interaction, and Social Organization の略で、言語学、教育学、社会学の各学科・学部において、特に実際のコミュニケーションの場面における言語使用の研究に従事する研究者（これには上で紹介した全ての研究者加わっている)によって運営され、定期的に発表会を主催する。また、LISO はこのセミナーへの連続参加やデータ分析の授業の登録を含めた、次の 3 つを柱とする共通の Ph. D. プログラムをそれぞれの学科ごとに企画して提供している。

- Enthographic study of naturally occurring interaction
- Interactional functional linguistics, which studies the structure of natural language and the properties of language in use
- Study of the sequential organization of activities that are mediated through language

LISO のセミナーは、秋、冬、春の毎学期 4 ～6 回、平均 2 週間に一度開催され、学内の専任教員はもとより、UCLA を含む談話・会話分析の盛んな近隣の大学や海外の大学の研究者を発表に招き、学科の持ち回りで運営されている。Gene Learner 教授から寄せられた情報によると、初回は、1993 年の秋学期に開かれ現在に至っているが、これまでの学外の発表者には、John Heritage, John Gumperz, Emanuel Schegloff, Candy West, Noriko Akatsuka, Paul Drew, Pamela Downing, Anita Pomerantz が含まれる。最後に、同教授から寄せられた 2002 年の冬学期からこの秋学期までの、セミナーでの発表者と題目を下の <資料> に転載させていただき、UCSB における語用論関連の研究の取り組みの紹介を終わりたい。

参考文献

Chafe, W. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subject, Topics, and Point of View." In C. N. Li ed. *Subject and Topic*, 25-55. New York:Academic Press.

Chafe, W. 1980. *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood: Ablex Co.

Chafe, W. 1994. *Discourse, Consciousness ,and Time*. Chicago:University of Chicago Press.

Cook-Gumperz, J. and Gumperz J. J. 1996. "Trecherous Words: Gender and Power in Academic Assessments." In H. Kothoff ed. *Folia Linguistica*, 30(3-4).

Clancy, P. 1980 "Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse.", In W. Chafe ed. *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. 127-202. Norwood, N.: Ablex Co.

Cumming, S. and Ono, T. 1997. "Discourse and Grammar." In T. A. van Dijk ed. *Discourse as Structure and Process, Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction Vol. 1*, 112-137. London: Sage Publications.

Du Boi, J. 1987. "The Discourse Basis of Ergativity." *Language*, 63: 4, 805-855.

Du Boi, J. 1991. "Transcription Design Principles for Spoken Discourse Research." *Pragmatics*. 1:71-106.

Du Boi, J. and Schuetze-Coburn, S. 1993. "Representing Hierarchy: Constituent Structure for Discourse Databases." In J. A. Edwards M.D. Lampert eds. *Talking Data: Transcription and Coding in Discourse Research*, 45-87. Hllsdale, New Jersey:Lawrence Erlbaum Associates Pub.

Gee, J. and Green, J. 1998. "Discourse, Literacy and Social Practic.", In P.D. Pearson ed. *Review of Research in Education*, Washington, DC: American Educational Research Association.

Giles, H. and Coupland, N. 1991. *Language, Context and Consequences*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.

Giles, H. and Noels, K. 1997. "Communication Accomodation in Intercultural Encounters." In J. Martin, T. Nakayama, and L. Flores eds. *Readings in Cultural Contexts*, 139-149. Mountain View: Mayfield.

Green, J. 1983. "Research on Teaching as a Linguistic Process: A State of the Art." In E. Gordon ed. *Review of Research in Education*, 10, 152-252. Washington, DC: American Educational Research Association.

Learner, H. G. 1991. "On the Syntax of Sentences –in –Progress." *Language in Society* 20: 3, 441-458.

Learner, H. G. 1996. "On the 'Semi-permeable' Character of Grammatical Units in Conversation: Conditional Entry into the Turn Space of Anotrhr Participant." In E. Ochs, E.A. Schegloff and S.A. Thompson, eds. *Interaction and Grammar*, 238-276. Cambridge: Cambridge U. Presss.

Mann, W.C. and Thompson, S. 1986. Relational Propositions in Discourse. Discourse *Processes.* 9: 1, 57-90.

Matthiessen, C.M.I.M. and Thompson, S.A. 1988. "The Structure of Discourse and 'subordination'." In J. H Haiman & S.A. Thompson eds. *Clause Combining in Grammarand Discourse*, 275-329. Amsterdam: Benjamins.

Thompson, S.A. 1987. "'Subordination' and Narrative Event Structure." In R.S.Tomlin ed. *Coherence and Grounding in Discourse*, 211-236. Amsterdam: Benjamin.

Wilson, T. 1991 "Social Structure and the Sequential Organization of Interaction." In D. Borden and D. Zimmerman eds. Talk and Social Structure: *Studies in Ethnomethodology and Conversational Analysis,* 22-43. Polity Press.

Zimmerman, D.H. 1992. "The interactional organization of calls for emergency assistance." In P. Drew & J. Heritage eds. *Talk at Work: Interaction in Institutional Setting.* Cambridge: Cambridge University Press.

Zimmerman, D. H. and West, C. 1975. "Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation." In B. Thorne & N. Henley eds. *Language and Sex: Difference and Dominance*. 105-209. Rowley, MA: Newbury House.

〈資料〉 UCSB における LISO セミナーのプログラム

LISO Schedule for Winter 2002

Coordinators: Amy Kyratzis & Jenny Cook-Gumperz

·Feb. 1 Phil Gaines (Assistant Professor of English and Coordinator of Composition, Montana State University) This will be a session to discuss Professor Gaines' article on Question-Asking Style in Courtroom Discourse. "Communicating with Juries: Episodic Representational Structure in Cross Examination".

· Friday, Feb. 15 Adam Kendon Univerity of Pennsylvania Annenburg School of Communication "The Pragmatics of Gesture".

·Friday, February 22 Sandra A. Thompson, Linguistics Department, UCSB "Linguistic Practices for Self-Repair of Overstatement and Other Utterances Leading to Possible Misapprehension".

·Friday, March 8 Amy Sheldon (U. Of Minn.) "Two systems of mutual engagement in preschool girls' and boys' dramatic play".

LISO Schedule for Spring 2002

Coordinator: Jack Du Bois

·April 12 Pentti Haddington (Department of English, University of Oulu, Finland) "Human Profiling? Taking Stances about Other People in Discourse—Work in Progress"

·April 26 Niko Besnier (Department of Anthropology, Victoria University of Wellington, New Zealand) "Crossing Genders, Mixing Languages: The Linguistic Construction of Transgenderism in Tonga"

·May 3 Celia Kitzinger (Department of Sociology, University of York, UK) "Politics and Conversation: The reproduction of normative heterosexuality in talk-in interaction".

·May 23-25 CLIC/LISO 8th Annual Conference on Language, Interaction, and Culture at UCLA.

·May 31 Regina Wu (Linguistics and Oriental Languages, San Diego State University) "Constructing newsness: The use of two prosodically different OUs in Mandarin conversation".

LISO Schedule for Fall 2002

Coordinator: Chuck Bazerman

·Friday 10/11 Lars Linton, Pre-Beginnings of Turns.

·Fri 10/18 Preparatory Informal discussion among ourselves of Michael Tomasello's book The Cultural Origins of Human Cognition.

·Monday 10/21 Michael Tomasello, "The Cultural Origins of Human Cognition".

·Fri Nov 1 Interactive video-conference with Yrjo Engestrom, discussing his article "The Discursive Construction of Collaborative Care".

·Fri Nov 22 Bazerman—"Letters and the Social Grounding of Written Genres".

@2002 日本語用論学会

『語用論研究』投稿規定

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)
2. 投稿論文は未発表の論文であること。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿締め切りは、毎年8月31日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。
5. 枚数、書式など。
   a. 原稿枚数：A4、横書き、15枚以内（注、参考文献を含む）
   b. 書式：余白は上・下30mm、左右25mmとする。1ページは32行x38文字とする。
   c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名を書かない。
   d. 例文の前後は1行アケル。
   e. 各節の前は1行アケル。
   f. ページ番号は裏面に鉛筆で記す。
6. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
7. 参考文献の書式は以下の例にならうこと。

   Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

   Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

   小泉　保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京：三省堂.

   野崎　昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2月号) 62-69. 東京：大修館.
8. 提出部数：原稿は4部提出する。なお、1部は鮮明なものとする。
9. 氏名（ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX 番号、e-mail アドレスを別紙に記入する。
10. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1
    関西外国語大学　澤田治美研究室内　日本語用論学会事務局
    TEL 072-805-2801（代表）　FAX 072-805-2890
    (「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)

＊ 他学会との二重投稿はお控え下さい。

@2002年 日本語用論学会

大会研究発表応募規定

1. 発表者は会員であること。
2. 発表要旨は、A4の用紙を用いて、余白を十分とり1行目にタイトルを明記し、25文字×30行で3枚以内にまとめて4部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
3. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知する。
4. 別紙（A4)に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mailアドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつける。
5. 発表時間は一人25分以内（別に質疑応答10分）とする。
6. 応募締め切りは毎年8月31日とする。
7. 宛先（問い合わせ）

   〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1

   関西外国語大学　澤田治美研究室内　日本語用論学会事務局

   TEL 072-805-2801（代表）　FAX 072-805-2866　(封筒の表に「研究発表応募」と朱書きすること。)
8. 応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。

大会ワークショップ発表応募規定

1. 発表者は会員であること。
2. 発表要旨は、A4の用紙を用いて、余白を十分とり1行目にタイトルを明記し、25文字×30行で1枚以内にまとめて3部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
3. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知する。
4. 別紙（A4)に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mailアドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつける。
5. 発表時間は一人15分以内（別に質疑応答5分）とする。
6. 応募締め切りは毎年9月30日とする。
7. 宛先（問い合わせ）

   〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1

   関西外国語大学　澤田治美研究室内　日本語用論学会事務局

TEL 072-805-2801（代表）　FAX 072-805-2866（封筒の表に「ワークショップ発表応募」と朱書きすること。）

8. 応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。
9. グループでの応募も可能。その際は、一人一人の発表要旨、タイトルと、グループ全体のテーマを明確にすること。グループの代表者とともに、一人一人の名前、所属などの用紙もつけること。

* 研究発表、ワークショップ応募とも、他学会との二重投稿はご遠慮下さい。